平成30(2018)年「正覚寺報」7月号

◆ご　案　内

①仏教壮年会お聴聞の会7月1日(日)20時～
②滋賀組十六日講7月15日(日)9時半受付～
十六日講は、滋賀組南組と北組のお寺が交互に営む伝統的ご法座です。
③仏婦例会（お聴聞の集い）7月16日(月)19時半
如来様のお喚び声に目覚める仏婦月例会です。どうぞ皆様賑やかにお参り下さい。

◆如来様のお心

寺院報“りびんぐらいぶず”は、お法りの枠組みを確認する意味で毎号続けてほぼ十年近く、

「りびんぐらいぶず」の「りびんぐ」とは、如来様がお手許で仕上げられた如来様の行を衆生が賜って行ずるお念仏を指します。鈴木大拙によって明らかにされました。

あるとき、最近号に目を通してくれた次男が、**「どうしてこれが続けられるのか」**と問いを発してくれました。なぜなら大抵の大人は困難な仕事には振り向こうともしないからです。

そのとき帰せずして口をついて出た言葉が**「ほっとけないからや」**でありました。

「そうやろうな」と云いながら、次男は「面白いからやろ」と追っかけて訊ねてくれました。それも当たっています。

応えながら、私は、いつのまにか如来様のご本願のお心に思いを馳せていました。

なぜなら、阿弥陀如来は、今生で苦悩する衆生を**「放ってはおけなかったからです。」**

「面白い」というのは、やや変換が必要ですが**「よろこばしい」**という言葉にしますと、これもまた、阿弥陀様が衆生を摂取なさってお慶びになるお姿に通じます。

りびんぐらいぶずの大きな課題は、お法りを頂戴する道行きを明らかにすることです。

伝統的に浄土真宗では"信心一つでお救いに与る“として「さあ、その信心を頂戴せよ。」と云われても、これほど難しいことはありません。

ここはどうしてもその道行きを明らかにして貰わねばなりません。

如来様のお心は、やはり「苦悩する衆生を放ってはおけない」ということでありました。

このため、如来様は、ご本願をお建てになり、その中心の第十八願では、自らは「南無阿弥陀佛」のお名号に姿を変え、名号を聞かしめることにより衆生に届こう」となさったのです。

ところが衆生はそのことに全く気付きませんので「お名号がどんなに素晴らしい」かを案内して下さる仏様がなくてはなりません。

今生では、それがお釈迦様だったのです。お釈迦様は、まず仏説無量寿経というお経様で仏願の物語を明らかにされ、実際に“南無阿弥陀佛”とお称え下さったのでした（第十七願「咨嗟してわが名を称する」）。

お釈迦様がお名号の尊さを物語としてお説きになり、実際に声に出してお称えして下さったればこそ、今生の衆生はその名号をお聞かせに与ることができたのでした。

ひとたびお聞かせに与るや、衆生は、ほんの少し心が洗われます。お名号を聞き（聞名）、心が洗われれば、心が“澄”んで参ります。“心が澄む”ことが浄土真宗の信心そのものだったのです。その効果として自分もお釈迦様に習ってお念仏してみたいという思いにかられます。

“お釈迦様に習って”とは、私においては、懐かしい祖父母のお念仏の姿に習うことです。

祖父母のお念仏の姿に心洗われるとき、私も又お念仏したい思いに駆られます。

称えれば直ちに大行が私の上で働き出され、南無阿弥陀佛と聞こえて下さるその瞬間、今生にありながら、衆生は阿弥陀様直々のお喚び声に喚び覚まされているのでありました。合掌。